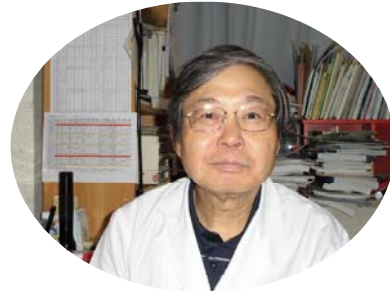


くわはた ひとし
桑波田 仁

桑波田診療所院長（垂水市）



【プロフィール】

出身は垂水です。祖父の代からここで診療所をやっている、亡くなった兄を含めると私で4代目ですね。学校は、中学校の途中から鹿児島で、大学は東京です。医師になろうと思ったのは父の仕事を見ていたからですかね。

専門は消化器内科ですが、今は、消化器ばかりというわけにはいかないの、内科全般ですね。大学を卒業して鹿大の医局に入り、10年ほど鹿大にいてローテーションで県内の病院を回り、鹿児島市医師会病院勤務時の昭和61年に父が亡くなったので、こちらに帰ってきました。兄と一緒に診療所をやっていたんですが、平成4年に兄が亡くなりそれから私1人ですね。

【日頃の思い、経営方針など】

ポリシーというか、極力、研修会や学会など積極的に参加して新しい情報を仕入れて治療することにしています。学会等に行き、自分がどのあたりのレベルでやっているかということを知りながら、できる範囲のことを目一杯やる、そして、できないことはできるところを色々探して専門の医療機関に紹介していくということです。だから、紹介状を書かない日がないというぐらいですね。紹介先はこちらの垂水中央病院も多いけど、専門は色々ありますから、例えば、古巣の鹿児島市医師会病院だったりします。それに、結構リウマチ患者さんが増えてきているので、平川の赤十字病院にいた先生で、最近、鹿児島市内に開業したI先生に紹介するなど、なるべく早く見極めて専門の先生たちに繋いでいます。

ここで開業して思うことは、自然が豊富で、自然相手に遊ぶところもたくさんあるし、物価も安く食べ物も美味しいことなどがプラス面ですかね。

地域の住民との触れ合いと言うと、元々、鹿児島、垂水の人間ですから、方言で格好をつけずに気楽にワイワイ言いながら診ていますよ。30年近い付き合いですから、家族の構成とか、顔を見れば、

この家はこういうおじいさんやおばあさんがいて、こういう病気だったとか、この家はこの傾向の病気が多いよなということなどが分かりますね。

【医師確保について】

行政にもう少し熱心になって欲しいというのが率直な感想です。医師任せにしているという思いが強いです。市立病院である垂水中央病院にしても、医師の確保など院長に任せて自分たちは何もしない、また、経営的にも、診療報酬改定などもあり、赤字になる危険性がある。

これらのことについて、行政として補填を含め何も言わない。CTとかMRIとかすごい高い機器を導入して医療の確保に努めていますが、これらの機器はランニングコストがかかるんです。これらの機器には私たち開業医も住民も大変助かっており、今さらこれがなくなると困るんですよ。この地域には過剰な設備だと見る方もいますが、実際私たちは、電話1本で今こういう患者さんただけど診てくださいと言うと、すぐ診てくれるんです。

開業医と中央病院との連携がしっかりできていたけど、それが下手すると赤字に転落になったときにちゃんと行政が見てくれるのだろうかということと、それから医師確保に関しても院長が一生懸命頑張っているけど、行政は分かっているのだろうかという思いですね。

やっぱり健康を担保にできない地域というのは誰も帰ってこないし、住みたいと思わないですよ。そこを自分たちは頑張ろうとしているけど、医師だけではどうしようもないわけですよ。行政もしてくれないといけません。

今の切羽詰まっている状態が分かっているのだろうかという思いですね。だって、医師が一人でも欠ければ、その分は他の医師に負担がかかることになるんです。そうすると肉体的、精神的にも続かなくなり、投げってしまうことにもなりかねないですからね。

住民の方々も、医師は当直の時は夜中ずっと仕事をして、次の日は全く普通に勤務をしないといけないわけで、当直明けということはないわけですよ。それを皆さんどうお考えなのかなということなんですよね。

だから、垂水市民の人たちはコンビニ感覚で行っている人もいますので、それは止めて欲しいですね。緊急性のある人はやむを得ないとしても、緊急でない人たちが夜間に行き、医師に仕事をさせるというのは止めて欲しいと思いますね。

市民の方たちというのは医師は365日24時間仕事をするもので、いつ病気になっても診るのが当たり前だというそういう感覚でいらっしゃるものだから。

ちょっと体調がおかしいなと思っても仕事で休めない、だから我慢して、もう我慢できなくなった夜間に医療機関に行くことが多いんです。私としては反対だと思いますよ。体調がおかしいときは早く来て、2～3日前から悪かったとか、朝から悪かったのか、夜に来たって最小限のことしかできないわけですから。当直の医師が1人、スタッフも少ない、そういうことも負担になっているんです。

次の日に我慢して行った人が手遅れになって亡くなってしまふというケースも希にありますが、基本は診療時間内に早目早目です。こちらはお年寄りが多いんだから、一つ崩れると次々と崩れていきますからね。

【プライベートについて】

こちらには私一人です。娘が二人いてどちらも東京で、産婦人科医と管理栄養士になっています。妻も娘と一緒に東京です。産婦人科医の娘は、仕事は楽しいと言っており、こちらに帰ってくる気はないようですね。自分も好きなようにやんなさいと言っていきますよ。

悪いけど、大隅で産婦人科というのは難しいと思います。医師は24時間365日と言ったけど、同様にお産は普通に生まれるのが当たり前だという考え方が根強い。1人産婦人科医長で1人で頑張ってる、頑張ったあげく訴訟だとかいう悲劇もありますからね。住民がもう少しお産は危険なものだということを知っていただきたい。医療というのは非常に不確かな一面を持っていることを理解頂きたいですね。私も一番困るのは、「絶対だよな。」とか言われるともう診たくなくなってしまうんです。「うちは絶対ということはい

言えないから、絶対と言い切る先生のところに行つてよ。俺はそんなのは診れないよ。約束できないよ。」と言いたくなりますからね。もちろん、万全は尽くしますが、非常に不確かなものだという、それを住民の方たちも理解して頂かないと、産婦人科も厳しいと思います。

私の趣味は、今、自転車に凝っています。昨日の地元紙にもありましたが、大隅半島は非常に自転車で走りやすい地域です。ロードで南大隅方面に行ったり、高峠に登ったりしています。昔は、車にも凝っていて、暴走族ではないですが、山口のサーキット場に日帰りしていました。朝3時ごろにここを出発して、夜の11時ごろ帰り着く。今はそういう元気はないので、自転車のほうにシフトしています。安上がりで健康にも良いですからね。

【医師を目指す大隅の子ども達へ】

医師としては、実地の医療と最先端の医療とがあると思いますので、自分の存在位置をしっかりと見極めて、大学病院なんかで研究する先端の医療をしてもいいし、地域の最前線で患者さんを診る生き方もあり、どっちもいいんじゃないかと思います。

しかし、地域医療に携わる場合でも、学会とか講演会など、そういったものには極力頑張つて行って、最先端の医療にも取り残されないように勉強することは必要だと思いますね。

私の場合は消化器病学会、消化器内視鏡学会と超音波学会という3つの専門医を持っているんですが、専門医を更新するには単位を取る必要があります、そのため各種の学会等に行っていますが、行ったら行っただけ手ぶらで帰るのはもったいないからいろんな情報を目いっぱい走り回って仕入れてきます。新しい情報をもとに患者さんに説明すると説得力がありますね。



ごとう まさみち
後藤正道

国立療養所星塚敬愛園長 (鹿屋市)



【医師を目指すきっかけ】

出身は九州です。というのも、父親が宮崎、母親が長崎、私はたまたま佐賀で生まれ、小学校は福岡、中学から鹿児島で、大学も鹿児島大学です。

医師にと思ったのは、高校2年の時だと思えますが、ちょっと哲学みたいなものに凝って、文系の心理学に行くか、医学部に行くかですごく迷い、いろいろな人に相談していたら、精神医学の方が幅が広くできるよと言われて、じゃということで医者になろうと思ったんです。

父は勤務医だったんですが、私には、何にでもなればと言っており、自分でそういうことは決めました。

専門は、もともと精神科に入ろうと思っていたんですが、すごく尊敬できる病理学の教授から、精神科をする前に、何年か病理学をやっても悪くないよ言われ、そのまま病理学にずるずると、病理学の中でも神経病理学という脳の病気を中心にやってきました。後にはハンセン病の方が専門になっていくわけですが、ベースは病理学ですね。

園に来た理由は、大学院を卒業した昭和58年に、ここがすごい医師不足で、当時の園長・副園長が一生懸命、人(医師)探しをやっていた頃で、たまたま、病理の先輩が、「後藤君、人を探しているよ。ちょっとでもいいと言ってるよ。行かないか。」と言うので、「良いですよ。若いから」という感じで来ました。

園にいたといってもいろいろあって、最初の2年間勤務した後、2年弱ドイツの研究所に留学して、その後平成7年まで、大学とここの併任でやっていました。平成7年から12年までは副園長でこちらにいました。その後、鹿大病院に准教授として勤務し、平成21年度4月に園長としてここに赴任しました。

園にいるときは、宿舎に単身で住んで、土日は鹿児島市の自宅に帰るという勤務でした。今も園長ということで、そうですが、土日夫婦というのもなかなかいいですよ。

【日頃の思い】

鹿屋市医師会に加入させていただいておられますが、皆さん地域医療に熱意を持って取り組んでいらっしゃる、マンパワーの少ない中、医療崩壊もせずやっているという印象です。私どもも何とかサポートしたいとは思っているんですが、どうしても国家公務員ということに難しいですね。

大隅で大変だなと思うことは、鹿児島市まで行かなければできない手術や高度な医療もありますが、大体のことは大隅でも鹿屋を中心にやれるというのはいいかなと思います。ただ、産科とか、小児の対応というか、特にこれから産科をどうやっていくのか、普通の開業の方々が、お産でのトラブルが出てくると産科をやめられるということがあるので、そのあたりは恐らく住民の意識も変えていかなければいけないと思っています部分があります。

お産は一定のリスクがあるし、お産の経過の中で子供に障害が出る可能性がゼロじゃない、しかし、それが完全に100%安全で、子供も100%でということになると、守りの医療になり、少しでもリスクがあれば鹿児島市に送るということになり、最悪の場合、大隅地域で分娩ができなくなってしまう可能性があり、若い人たちが大隅に住まなくなるというようなことにもなる。

幾ら医療が進んでもお産には一定のリスクが母子ともにあるのだということを知ってもらおう。それでも大隅地区でそういった人も含めてサポートしていくんだという、地域の理解というのがとても大事で、地域でそういった医療を守っていくという気持ちがあれば、ドクターたちも頑張っただけじゃなく、いい意味でのサポート隊なりの、苦言も言うけどサポートするようなシステムがあるといいかなと思っています。

園は特殊な病院ですから外来を普通は受けず、入所者に対するサービスという形でしかやっていません。それでも、ここの患者さんで、園では治療できない、大きな腹部の手術だとか、また心臓やがんの手術と

かになると、どうしても地域の病院にお願いしています。

一方、我々の持っている医療資源を地域医療に少しでも役立てないかということ、今は、そんなに多くはないですが、こちらの大きな病院で、がんの手術があるとき術中迅速病理診断は受けています。また、手続きを踏んで、園の消化器の専門の医師が鹿屋医療センターで難しい症例の内視鏡のお手伝いをしたりとかもやっています。地域のためにやってくるといいますが、園の生き残りとしても必要ですから、入所者の自治会にも了解をもらってそういったことをやっています。

【医師確保について】

私が最初来たころは、インターネットのイの字もない頃で情報不足、情報を得るのがとても大変だったんですが、今や、大隅だからといって、少なくともネットでやれる情報に関しては田舎にいての不利がなくなっています。もちろん、全てが解消されたわけではないですが、勉強する気さえあれば情報過疎ということはないと思います。

ただ、大きいのは、多分家族だとか、特に子供の教育の問題だと思いますね。長くこちらで勤めたりしていくときにそういったものがどうしてもネックになって、奥さんとお子さんは向こうにいて、こちらは単身生活というような形の勤務医の方や開業医の方は実際問題として多いです。ですから、そのあたりがもう少し地域完結ができれば魅力的なのかなというのがあります。

医師会の先生方が地域の医療に対して責任感をもってやっております、そういうところがあるのはいいと思いますが、皆さん高齢化で、50歳以下の人は何人かしかいないのがちょっと問題で、どうやって世代交代をやっていくかということとは難しいですね。例えば、民間のコンサルタントではなく、医師会の中に、地域開業アドバイザーみたいなものがあって、それに行政の人が絡んでいったらということも思いますね。

【プライベートについて】

家族は鹿児島市内で、単身でこちらにいます。4人の子どものうち、3人が医師になっておりまして、長男は今、家族でアメリカに6年位います。彼が日本に帰ってくるときには夜間急病センターに何日か勤務することもしています。

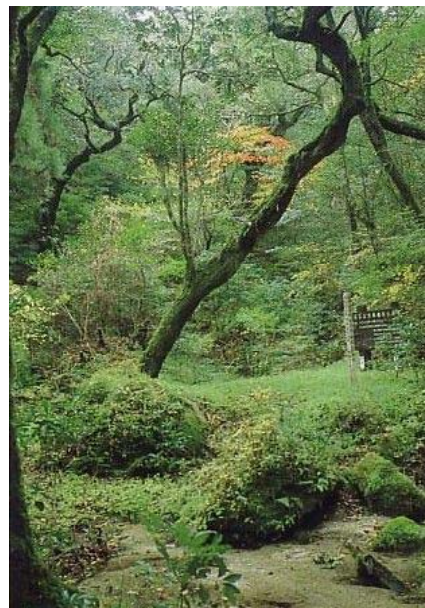
趣味は、二つあって、一つは音楽で合唱を、もう一つは写真です。歌を歌いに鹿児島市のほうの合唱に行ったり、稲尾岳まで行って写真を撮ったりとか、そういうのが休日の過ごし方です。あとは内之浦に行つて魚を食べたりとか、垂水市の猿ヶ城の溪谷の写真をとったりすることもあります。そういうところが好きな場所ですね。

焼酎も、地元の焼酎ですね。最近ちょっと浮気して垂水の水を使っているものも飲んでます。垂水市の水ビジネスではすごいと思います。

【医師を目指す大隅の子ども達や全国の医師、医大生へ】

どこの医学部でもいいと思いますし、そして研修医というか、若いうちは別に鹿児島にとどまることなく世界中どこでも行って、御自分の道がある程度極めて、50、60にならないうちに、早目に自分のそういった知識なり技能なりを持って、できれば30代後半ぐらいから40代前半のときに大隅に帰ってきてもらって、大隅のために尽くしてもらえたら、自分もハッピーだと思うし、地域の人たちもハッピーじゃないかなと思います。

全国の医師、医学生に対してですが、恐らく大きな都市であれば、自分一人がいなくても多分医療は回るとは思います。こういったところで仕事をしていると、自分一人の地域の中で果たす役割がすごく明確で、それだけ責任もあるけど、やはり一人一人が本当に大事になってくるので、そういった意味ではやりがいのある場所だと思いますよ。



稲尾岳（錦江町，肝付町，南大隅町）

さいはら てっし 才原 哲史

曾於医師会立病院長（曾於市）



【プロフィール】

私の父が教員だったもので、転勤で県内特に始良郡中心にいろいろなところに行きました。生まれたのは霧島市の日当山です。また離島の十島村にも赴任しました。小学校は蒲生小，吉松小，中学校・高校はラサールで，大学は鹿児島大です。

最初は法学部にとっていたんですが，文系の点数が取れず，理系に進みました。

身近に医者はいません。親戚は教員と軍人，国鉄職員でした。いとこがブラジルで病理医をやっています。

私の専門は外科です。外科に入ったわけは「内科は文献を読み，勉強を一生懸命しなくてはいけない」と思い，「体力勝負の外科だったら少しはどうにかならんじゃないかな」という安易な理由でした。

大学を卒業して鹿児島大学の第一外科医局に入り，いろいろな関連病院に出張しました。最初は国立指宿温泉中央病院，それから大島に行って，宮崎江南，大阪の大野病院というところにも行きました。野田町立病院，枕崎の牧角病院，小林市民病院にも勤務しました。国立志布志病院にも3年余り外科で勤務しました。アメリカのミシガンに1年ちょっと留学もしました。今給黎総合病院にも8年以上勤務しました。こちらの曾於医師会立病院には平成14年に院長として来しました。ここは田舎です。周りに人家も少ない所に病院が立地しています。若い医者でもほとんど家庭持ちです。子供の教育などで単身赴任が多いです。私も12年ずっと単身で来ています。やはり市街地に病院はあるべきと考えます。

【日頃の思い，経営方針等】

本院は医師会立病院であり，地域医療支援病院と災害拠点病院の指定を受けております。整形外科，外科の手術をたくさんしています。地域の夜間急病センターも持っています。しかし，医師看護師不足のため，運営は厳しいです。地域医療はどこでも同じでしょうが，マンパワーが少ないとやり繰りが大変です。例えば何か専門的に診てほしいと思ってもその医師が非常勤医師ならいつもいるとは

限らない。だから，開業医の先生も紹介する患者さんが限られてきます。若い元気な医師がたくさん欲しいです。

一番の問題は医師不足です。全国的に地方の医師が減ってきている。平成14年に私が赴任したときと比べ医師は半分になっています。今の研修医制度では，都会に集中するし，大学に残らず，一般の大病院に行く。そこは給料も出ますし，居住環境とか研修環境などいろんな面で恵まれています。そんな病院に行って家庭を持ったらもう大隅などの地方には帰って来ません。

今，当院では一般内科医が大学病院人事にて派遣中止になりました。私がいわゆる総合診療科として，色々な患者さんを診ています。ほかの若い医師にはなかなかさせられません。他の医師たちも全員鹿児島大学病院からの派遣です。すぐまた1～2年ごとに変わります。整形外科，外科の手術を本院で経験して，また大学で学問をして研究発表をして立派な医師になるということです。

このような状況なので，ここの救急・消防隊は大変です。隣接する都城や鹿屋方面に搬送されることが多いです。都城医師会病院が移転新築工事中で，平成27年4月には完成します。そうなるとこちらから10km程遠くなりますので不安に思っている住民も多いと思います。

一方，大隅と鹿屋市との東九州道路は年末に開通したので救急搬送時間が短縮され住民にとって良くなりました。

県ドクターヘリも運用されています。現場から直接救急患者を鹿児島の病院に運ぶことが多いです。また，地域の医療状況から言うと，ドクヘリが夜間は飛行禁止であることも問題です。自衛隊のヘリだったら飛べるけど，大型のため搬送先の病院の着陸する屋上の強度の問題があり，ドクヘリが飛べるための環境整備を待ちたいと思います。

曾於医師会の問題を言うと，有明病院が海の近くにあり，予測される南海トラフ地震，津波による被害が想定されています。また，曾於医師会立病院も老朽化や立地不便性の問題もあります。

2市1町と色々と検討していますが、まずは、地元の住民の方々の地域医療に対する意思を確認する必要があります。

一方、在宅医療もやって行くべきでしょう。地域住民との触れ合いが必要です。今、肝属郡医師会立病院は一生懸命取り組んでおられます。しかし、開業医が益々少なくなるであろう近い将来には肝属郡医師会と同じように我々もしないといけないことになると思います。

【プライベートについて】

鹿児島市に自宅はありますが、こちらに単身赴任です。今、娘が2人目を産んだものだから、1人目と2人目を妻が一生懸命あやしています。

子どもは娘と息子が2人の3人で、みんなもう独立しています。

休日には孫を見に帰ります。孫がまたやんちゃですから困ったものです。

曾於地域で有名なものとしては、岩川八幡神社の弥五郎どん祭りがありますね。悠久の森とかもありますが、この辺は全部山野です。病院の周りも人が住んでいる気配がないでしょう。運動不足だから夜、散歩で歩いたことがあるのですが、歩行者が少ないという前提で車がスピードを緩めないで走るんです。歩道もないし、危ないなど思って止めました。運動不足は解消しません。

【医師を目指す大隅の子ども達へ】

子ども達に言えることは、とにかく田舎の人はみんな困っており、医療を求めています。だから医師を目指して郷土のために働いてください。そして、一生懸命働けば人のためになりますし、自分の腕で病める人を救えます。そのため勉強に頑張ってください。大隅が日本の地域医療のモデル地域となるように、若い力を待っています。



弥五郎どん祭り



おおすみ弥五郎伝説の里公園

しら いし ただふみ
白石 匡史

医療法人青仁会池田病院脳神経内科部長
(H26.11～まちのお医者さん院長)
(鹿屋市)



【医師を目指すきっかけ】

私は、始良郡湧水町の出身で、中学、高校は鹿児島市内、大学は鹿大です。医師になろうと思ったのは、小1の時に読んだ「野口英世」の伝記で、その思いをずっと持っていました。でも、大人になった時に聞いたんですが、これは実家で開業医をしていた親の作戦だったそうです。

専門は神経内科で、鹿大の第3内科から、主に、鹿児島市内の病院等で研修し、その後、今は閉院している霧島温泉労災病院で2年間研修した後、平成11年8月に、池田病院に来ました。こちらに来るきっかけは、全くの偶然で、それまで週1回勤務していた先輩が辞めることになり、医局から、後任に行ってくれないかという話があり、行くことになりました。

週1回の勤務でしたが、リハビリがしっかりしていて、施設療養、在宅療養へ向けるマネジメント能力がある非常に良い病院だなという印象を持ちました。また、同級生とか知り合いの先生も多くて、霧島の次をどこにするかという時期でしたので、医局に是非池田病院に常勤でとお願いして常勤となりました。常勤になって約14年余りとなります。

【日頃の思いなど】

勤務して大変だと思ったことは、私が結構“当たる”方で、様態の急変、救急車、看取りなど、非常勤で来はじめた頃、私の当直の晩だけ患者様が亡くなるということが何週間も続いたときはへこみましたね。でも、患者様、ご家族、スタッフ、院内外の先生方にも自分の思いが伝わっていないことがあると、もっとへこみますね。

神経内科ということで、「神経」という言葉が入っているので誤解を受けるんですが、脳卒中とか難病～パーキンソン病とか筋萎縮性側索硬化症～とかが専門分野なのですが、それは地域の方たちには全然理解されず、何年か一緒に勤めた薬剤師の先生から、「へえ、白石先生はパーキンソン病を診れるんだ」と言われたり、10年以上つき合いのある地域の方

の身内が認知症になられて、「どこに行ったらいいと思う？」と聞かれたから、「私は診れますよ」と言ったら、「へえ、先生、認知症を診れるんですか？」と言われる経験は多々ありました。患者さんから「お前は要らん」と言われたこともあります。

着任した15年前より多少は改善されたと思いますが、地域の中では神経内科が認識されていないというのが一番大変だなと思います。

大隅に来てよかったなと思うところは、自分の出身県でありながら、それまで大隅と全く関わらずに生きてきたので、こういう大変な状況なんだという自分の知らない世界を見れたことが一番よかったなと思います。地理的なことが非常に大きいと思います。鹿児島市内で仕事をしていけば、大隅のことを一切気にしなくて生きていけるので、たまたま御縁があつてこちらに御厄介になって、知らなかった世界を知ることができたなと思っています。

今から大変になるんですが、11月に鹿屋市内で在宅支援診療所を開業することとしているんです。

お褒めの言葉とか、ありがたいお言葉をいただいたこともあるんですが、逆に、私は、患者様やご家族に自分で判断できるようになって欲しいと思っっているいろいろな説明してきたつもりだったのが、患者様も、ご家族も、当院の看護師達も、私の許可とか判断を求めてからでないとか何かしっちゃいけないんじゃないかと思込まれてしまって、それは私の説明の仕方とか言動が足りなかったのかなと反省しています。

【医師の確保について】

若い医師を確保するためには、簡単に言うと、鹿児島市内よりも高い給料を払える病院がないと人は集まらないですが、給料でないとすれば、よほどやりがいの見えやすい職場でないといけないと思います。

大隅のいろいろな先生たちが地域の特性に合ったことにいろいろ取り組んでおりながら、それをアピールしていないということもあると思います。例えば、肝属郡医師会立病院がオレンジプランにのっとった認知症サポートをされていて、かつそのこと

を鹿大の学生さんたちに先日ご講演される機会があったのですが、ああいったことをもっともっと大隅の先生方全体がされていられるべきじゃないかなと思います。

私自身も研修のときそうだったんですが、早く一人前になりたいという焦りがあるんですね。そうすると、聖路加とか、虎の門とか、そういう全国的に有名な研修病院で早く腕を磨きたいと思う人が現れるのは当たり前のことだと思います。大隅で頑張っている先生方の声を定期的に若い学生さんたちに、できれば、医学部の5, 6年生の来年は国家試験という方たちでなく、1, 2年生の低学年の方たちに聞いてもらったほうが、よりためになるんじゃないでしょうか。

【プライベートについて】

息子は今、長崎の高校にいており、鹿屋には、妻と娘の三人で住んでいます。趣味は、病院のHPにはボウリングとクレ射撃と書いてあります。でも忙しくて、射撃は免許を失効しない程度、年1~2回しかやっていません。休日の過ごし方としては、息子や娘の用事があるときはそれに合わせて動いています。

大隅の好きな場所というか、風景は、鹿屋市の花岡から古江にかけて、夕日の時間帯に見る錦江湾の風景がすごくきれいだなと思いますね。晴れている日の海面がエメラルドグリーンに見える時もすごくきれいだなと思います。

食べ物については、鹿屋に家族で越してきた一番最初に思ったのは、鹿児島市内の居酒屋さんと比べて、同じ質で何でこんなに料金が安いんだろうと思いました。今はおしゃれな店とか高い店も増えてきているので、そうでもなくなっているとは思いますが、引っ越してきた当時はびっくりしました。「これで二千円」と思いました。焼酎は、「小鹿」はもちろん好きですけど、水割りでも飲む「海」も好きです。

【医師を目指す大隅の子どもへ】

私自身の経験を混ぜて言うと、小学校時代によほどの才能や好運に恵まれない限りは、何も考えずにお医者さんになれる人は皆無に近いですね。だから、プロ野球やJリーグのサッカー選手を目指すのと一緒に、頑張るからには情熱を持っ

てシュートや素振りの練習をするのと同じ感覚で勉強をし続けないと行けないと思います。

でも、誰かを助けたいとか誰かの役に立ちたいという思いがあれば、必ず行けます。私の同級生でも、医学と関係のない大学の学部を出て、一般の会社に就職して、それからもう一回、一念発起して勉強をし直して医学部に入ってきた同級生はたくさんいました。

【全国の医師、医学生へ】

私は鹿児島県以外で働いたことがないので、本当に井の中のカワズなんですね。なので、自分のやっていることや考えていることが正しいかどうか常に自信がないというか、自問自答しながらやっているんですが、少なくとも言えるのは、鹿児島県全体、特に郡部のほうは、今の高齢化社会を10年から20年、全国平均を先取りしているのだから、そこでどうやって、いかに長期入院とか社会的入院をさせずに人々の役に立つというか、地域で役に立つ医療を行うかということに関しては、大隅半島は絶好の研修場所であると思います。

そして、そういったところでやると自然と総合内科医的な力がつくので、それはもちろん個人の志向性とか意識によって違うことではあります。例えば、私は、お腹が痛かったらとりあえずこうしようとか、胸が痛いと言ったらとりあえずこれを調べようとかが全部一通り頭の中に入っているんです。でも、それは普通に神経内科だけをやっていれば身につかなかったことなので、今、夜間急病センターでも当直とかはさせてもらっているんですけど、そういうので例えば小児を最低限診るやり方を覚えさせてもらったりとか、池田病院は透析がメインの病院なので、透析の患者様が来たらとりあえずこういう処置をしてということ覚えさせてもらったりしているので、「専門外だから診れない」と言わない方を多分大隅は必要としていると思います。「僕は専門じゃないから診れないがよ」と言う方ではなくて、「専門じゃないけど、診れる範囲で診ようか」と言う先生方を必要としていると思うので、いわゆる厚労省の言う総合かかりつけ医になりたいと思っている先生に来てほしいです。



(錦江湾に沈む夕日)

たけなか としひろ
竹中 俊宏

垂水市立医療センター
垂水中央病院副院長（垂水市）



【プロフィール】

鹿児島市出身で、小学校・中学校・高校・大学は全て鹿児島市内で過ごしました。

医師になろうと思った動機ですが、生まれた時から右足の指に良性腫瘍があり、何回か手術を受けました。小学校の時、担任の先生から「あなたは将来お医者さんになって、自分でその病気のことを診ることが出来るようになれば良いのでは」と言われたことが大きいと思います。

専門は循環器内科です。医学部の学生時代から循環器疾患には興味があり、大学を卒業する頃、循環器の先生方とお話をさせて頂く中で、皆さんがしっかりして筋が通っておられ、この先生方に教えてもらいながら仕事をしたいと思い、入局を決めました。

卒業後は、鹿児島大学病院（旧第一内科）の病棟で研修をして、鹿児島市医師会病院、宮崎県的小林市立市民病院、鹿児島市の南風病院、2回目の鹿児島市医師会病院を経て鹿児島大学病院（旧第一内科）に戻り、平成5年12月から一年間、東京都臨床医学総合研究所で遺伝性の心臓病の研究をさせて頂きました。また、平成8年5月からは米国の国立衛生研究所（NIH）に留学し、遺伝性の心臓病の研究を継続させて頂きました。そこから平成11年3月1日に大学に戻り、平成24年10月31日まで大学での診療・研究・教育に携わらせて頂きました。

垂水中央病院には平成24年11月1日からお世話になっています。大学で仕事を続けさせて頂く一方で、地域医療を中心としてやっている病院で臨床医として勤務したいという思いもあり、医局人事の中でご縁があり当院に勤務させて頂くようになりました。

【日頃の思い】

昨今全国の大部分がそうですが、大隅半島は特に高齢者が多い。少子高齢化が進んでいて、例えば垂水市だと高齢化率は37%程度です。子供さんは少なく、人口は継続的に減りつつあります。

その中で、高齢者の方々が緊急の治療を要するような病気を発症されるわけで、当院でそこへの対応をしっかりすることが重要と思っています。垂水市内で

急性期の患者さんを診ることが出来る病院は他にありませんので、まずは当院でできることを一生懸命にやらせて頂こうと考えられています。その後、ある程度急性期を脱した方々がそのまま直接ご自宅に帰れば良いのですが、中々難しいことも多いのが現状です。そのため、今後、地域包括ケアが極めて重要になると日頃考えています。

【医師確保について】

非常に難しい事だと思います。少なくとも我々が卒業した頃は、鹿児島大学の卒業生の多くが鹿児島に残っていました。しかし新臨床研修制度が始まって以降、皆さん都会の方に出て行く傾向が続いていると思います。

ですから、鹿児島大学を卒業した若い先生方にいかに県内で研修してもらおうか、あるいは都会で研修している先生方をいかに鹿児島に帰って来て頂くようにするかということを考えなければいけないと思います。とにかく鹿児島の若い医師の数を増やすことが先決であり、そのために、いかに魅力ある初期研修をアピールできるかということが非常に大事になります。

その中で、当院が果たせる役割があれば、積極的に果たして行きたいと考えています。

【プライベートについて】

子供は2人で、鹿児島市内におります。休日は、子供たちを連れて大隅半島をドライブすることも多いです。錦江町の大浜海水浴場が好きで、子供たちが小さかった頃にはよく行っていました。

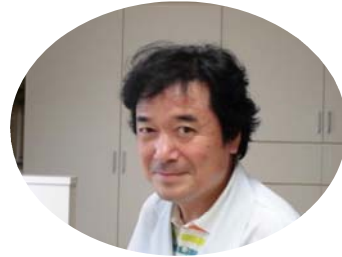
趣味については良く聞かれるのですが、私には残念ながらこれといった趣味がなく、それが今後大きな問題となると思っています。患者さんと接する中で、趣味を持っている方は、現役を引退された後もとて生き生きとしておられます。そういう意味で、これは何とかしなければいけないと思っています。

【医師を目指す大隅の子ども達へ】

色々な職業がありますが、やはり自分が好きだと思う職業に就くのが一番だと思います。その中で、医師という職業は、もちろん大変ではありますが、非常にやりがいがある仕事だと思います。ぜひ、大隅の多くの子供たちに志して欲しいと思っています。

たて ばやし よしひろ
榎林 義寛

桜ヶ丘病院長（鹿屋市）



【プロフィール】

生まれは大口です。小学校は鹿屋市で、中・高校は鹿児島ラサール、大学は九大です。以後、福岡でずっと生活してきました。医師にと思ったのは中学校くらいで、理由は、父がこの桜ヶ丘病院をされており、長男でもあったことから何となくやっぱり継ぐんだらうなと思いました。

もともと父は鹿児島市出身なんです。が、大口病院の院長から鹿屋市に転勤で西原保養院の院長として赴任して、鹿屋のほうに一家で転居しました。その後、父がこの地を好みまして、鹿屋で自分の病院を作ろうということを決心し昭和41年に桜ヶ丘病院を建設しました。

専門は精神科です。父の跡を継ぐということで精神科に進みました。大学を卒業して、福岡を拠点に、佐賀とか、北九州とかで勤務していましたが、平成6年、36歳の時にこちらに戻ってきました。

父と一緒に約5年間程仕事をしまして、そして平成11年に父が亡くなったものですから、私が院長を継ぎました。

戻ってきた理由は、父が帰ってきてくれないかという話があったことと、私も、長く大学に残っていると、結局、学校の先生、要するに、教授みたいな仕事になるんですが、私は、むしろ臨床の方が良いと思っており、また、元々、帰るつもりでもあり、十分遊ばせてもらったから、もういいやと思って帰ってきました。

【日頃の思い】

経営方針は、きれいごとを言うようですが、やはり地域の困った患者さん方を助けるといふ方針で病院運営をしていきたいと思っています。

やはり患者さんあつての病院ですので、できれば患者さんやその家族からありがたいとおっしゃってくださるような病院にしたいと思っています。

うちは病院と言っても規模が小さいので、小回りがきくというか、職員間のチームワークのよさということがあります。また、前院長の教えというか精神が残っていることや、私の考えが職員全体に伝わりやすいということもあります。

こちらで開業して大変だなと思うことは、やはり、医師がなかなか来ない、特に精神科はほとんど来ないということです。精神保健指定医が、ここ10年位は、私を含め実質4名で増えないんです。

全国的に精神科の先生というのは、増えているんですが、県内でも多くは鹿児島市などで、メンタルクリニック、心療内科を開業している。それこそ精神科救急とか、重度の精神障害の方々のケアをする精神科医の数が少ないんです。夜間とか、救急とか、それに小児の精神とかもないので、私どもがしないとしようがないんです。

大隅は、認知症のほうも疾患センターもできない。また、アルコールの専門医もない。だから、今いる先生方が全部しないといけないので、だれも専門になれない状況です。

逆によかったと思うことは、鹿屋は、先ほども言ったように、市全体も小ぢんまりとしており、医師会員130名ぐらいです。その中で他科の先生方とも顔見知りになって、やっぱり全科的にチームがつくれている、医師会がうまいこと機能していて、全科的なネットワークが組んでいるというのはほかの地域ではなかなかできないところだと思います。

患者さんや地域の方との触れ合いということで言うと、うちがもう少し余裕があったら、それこそ地域のために何かイベントをするとか、もちろん他のイベントに対する協力はしていますが、こちらが主催してということまでは今のところ開催していません。他の病院さんみたいにやれば、それなりに一つの大きな地域の力になっていくんでしょうけど、これはうちの病院の今後の宿題ですね。

【医師確保について】

やっぱり鹿児島市へのアクセスがもう少し便利になったら全然違うと思います。鹿児島と指宿みたいな感じの近さがあればいいんですが。鹿児島と指宿は1時間ぐらい、鹿屋と鹿児島は2時間、鹿児島はどこかに行こうと思えば2時間かかるわけですよ。1時間に何とか縮まればかなりいいと思います。

他では教育環境ですかね。子供の教育のために自分は鹿屋の自宅に居て、奥さんと子供さんは鹿児島市内に居るという逆単身赴任がすごく多いんです。うちもそうでしたよ。

だから、アクセスが鹿児島市まで1時間ぐらいであればいいのかなと。それは将来の夢ですね。新幹線がここまで延びてくればいいんですけど。

子供の教育環境でというのと、今、肝付町に新しく楠集中・高校ができますよね。ああいう取り組みはいいんじゃないですかね。それでレベルが上がり、実績が上がれば、教育面で安心感、信頼感が出てくると思いますよ。

【プライベートについて】

家族は妻と子供が3人です。子供はみんな大学に行っていますので、今は妻と2人でこの病院の隣に住んでいます。

子供は、長女が九大の医学部6年生、次女が福大の薬学部4年生、長男が鹿大の医学部1年生です。楽しいですけど送りなど大変です。

長女は小児精神をしようかと思っているようです。小児精神はこっちに来てもペイしないと思いますので、帰ってくるにしても、それこそ鹿児島市に住んで、こっちに週に2日來るとか、何かそんな感じになるんじゃないですかね。女性の先生だとお母さん方も相談しやすいということはあるかもしれませんね。

趣味はゴルフです。ゴルフが大好きで、鹿屋市医師会が20名ぐらいで同好会を作っています。毎月1回、大隈カントリー等でプレーしています。

本格的に始めたのはこっちに帰ってきてからで、40歳頃からです。休日に練習したいんですが、休日は、入院患者さんの医療保護入院の報告とか、年金診断書とかを書いているとほとんどつぶれてしまうんですよ。保健所の指導がありまして、書類がいっぱいあるんですよ。だから、そこがつらいですよ。

大隈半島で好きな風景は、錦江町の大浜海水浴場から見た開聞岳とか、鹿屋市古江の岬を下るときの錦江湾と開聞岳の風景とかですね。普通にこの辺の高隈山もいいと思いますよ。

食べ物で言うと、何でもおいしいです。よくお客さんが来たら肝付町内之浦の魚

料理屋さん連れていきます。焼肉屋さんも結構おいしいところが多いと思います。

【医師を目指す大隅の子供達へ】

医者という職業に就いてありがたいと思うことは、やりがいがあって、やったことに感謝される数少ない職業ではないかということです。仕事をしたことで感謝されることが結構多いので、やりがいのある仕事だと思います。

加えて言うと、医者という職業は、人の命を助けたり、困っている人を助けるのに直接的にかかわることができる職業の一つであり、大変だけどいい職業選択の1つではないかなと思います。

【全国の医大生、医師へ】

昔だと1回1回大学の図書館に行って調べないとわからなかったことも、最近は、インターネットがあるので、鹿屋にいても情報的には全然遅れることはありません。

インターネットを使って常に新しい情報を得て勉強することは鹿屋でも十分出来るから、へき地であることのハンディーキャップはほとんどないので、むしろ、田舎のメリット、空気がいいですし、風光明媚ですし、食糧がおいしいですし、いろんな生活のコストが安いので暮らしやすいと思います。遊びに行くとするれば都会に行けばいいだけのことでですから、その意味で今の時代はメリットのほうがやはり大きいと思います。

あとこの辺のいいところは、やっぱりまだ昔の風習といいますか、都会よりも医者さんを皆さんが大事にしてくださるというのがありがたいですね。都会では余り大事にされないんですけど、こういうふうな地域に来ますと、まだ昔の良いところが残っています。感謝されることが多くて、大事にされるのでとてもありがたいですね。



《えっがね（伊勢エビ）【肝付町観光協会】》

た な か み ほ 田中 美保

福田病院（鹿屋市）



【プロフィール】

出身は熊本市です。実家は熊本市内ですが、父の転勤があったので、小さい時は千葉とか横浜とかにいたんですけど、小学校から中学校の前半ぐらいまでは主に水俣に住んでいました。その後は父が熊本市内に勤めるようになったので、その後は熊本市内ですね。大学も熊本大学でした。

医師になろうと思った時期は高校生の時ですね。高校時代に1年間シアトルに交換留学をしていたんですけど、ホームステイ先のお子さんがちょうどその間に脆弱X症候群の診断がつかしました。そのことも結構影響は大きいかなと思います。それと、子ども病院が近くにあって、プレイセラピーのボランティアを募集していたので少し通ったんですが、職場体験もその子ども病院に行きました。こういう仕事があるんだなと思ったことも影響していたのか、専門は小児科で、今やっている仕事は小児リハ、療育の分野ですね。

熊本大学を卒業後、そのまま大学の発達小児科に入局し、北九州の総合療育センター、熊本市市民病院の新生児センターや鹿児島市立病院などに勤務しました。こちらの病院には平成21年4月から勤めており、主人が鹿屋医療センターに転勤で来たことがきっかけです。

【日頃の思い】

都会はあまり好きじゃないので、こちらは自然もいっぱい、子育てをしながら生活する場としてはすごくいいなと思いますね。

それから、小児療育は、病院間の連携はそれほど多くなくて、どっちかというところ、保育園や幼稚園、学校、療育機関などとの連携の部分が大きいんですが、狭いというか、人口の少ない地域なので顔見知りになりやすいところがありますので、そこはすごくやりやすいなと思いますね。いろいろなコーディネーターの方やケースワーカーの方とかとお話をする機

会も多いですし、訪問も保育園や幼稚園の数に限られているので、先生方とも関係をつくれるので、すごくやりやすいなと思います。

【医師の確保について】

今している仕事が、当直、日曜日の出勤もないので、一般のお医者さんとは大分違うだろうなというのはすごく思います。

一般的な意味で小児科医としてということであれば、やっぱり患者さんを自分が診ていて大きな病院に送らなきゃいけないとかというときの連絡のしやすさだったり、かかる時間とか、そういうのはすごく大きいですね。やっぱり安心して地方で診るためには、いざというときは受けてくれる大きな病院があるということがすごく大事だと思いますね。

それから、年齢が上がると、当直など体力的にしんどくなるので、体制がしっかりできているというのは大きいですね。熊本大学病院勤務時は、休日・夜間当番とかをする立場にあり、若いうちはそれを頑張っていたんですが、歳をとったら免除して欲しいと思いますね。一晩起きていて、仕事をした後の翌日の勤務とかはきついし、医療事故とかのリスクも高くなるので、そういうところの体制ができて今の鹿屋市夜間急病センターのように診てくださる方がいらっしゃって、昼間の診療を安心して、責任持てるという体制はやっぱり必要ですね。

【プライベートについて】

今は主人もこの福田病院に勤めています。子どもは、小学6年生、3年生、1年生と3歳の4人です。

仕事と家庭の両立については、自分が小児科医なので子育ては仕事にも役に立っているというのは大きいですね。自分で行っている仕事が家庭生活にも反映されて、家庭生活で苦労したりしたことが仕事にも反映されてということもあります。

今3歳の子は幼稚園に出しているのですが、保育園のように子どもを預けて働くお母さんたちじゃなくて、一緒に子育てをしていく仲間みたいな感じの関係なので、そういうのもすごくいい経験だなと思います。実際にはやっぱり仕事が終わらなかつたりするので、一応6時まで延長保育をしてくださるんですけど、6時に終われなくて、園に迷惑をかけたりとかというのはあります。

小学校とか訪問に行くと、先生方が授業の関係で、4時ぐらいから会議というか、いろいろ情報交換とかになるので、6時に終わらないこともあります。途中で抜けましても言えなくて、園の先生がご厚意で見えてくださることもあり、すごくいろんな協力を頂きながら続けているというところはありますね。

幼稚園は行事も多く、子ども達の様子もよく見ることが出来て、また自分のしている仕事で園の方にちょっとアドバイスをして差し上げられることもあります。学校に関してもそれはかなりありますね。PTAとかに行くと、学校の先生にいろいろ相談を受けたりとかというものもあります。

今は趣味と言えるようなものはなくて、そこまで時間を割けていないですね。PTAの活動とかはちゃんとやっていますけど。

【大隅の魅力について】

風景は、すごくいいですね。特に、海が綺麗ですよ。私、熊本なのでやっぱり同じ湾というか、内海の不知火海と比べると錦江湾は湾なのに何でこんなに綺麗なんだろうというぐらい綺麗だし、山もいいですよ。そういう自然の風景は本当にいいなと思いますね。

子どもと公園という感じの所に遊びに行くことが多く、大隅広域公園もそうですけど、何か一気に広い場所で思いっきり遊ばせられる場所というのがたくさんあるのはすごくいいですよ。

【医師を目指している大隅の子ども達や全国の医師、医大生へメッセージ】

小さい頃のいい思い出、いっぱいお友達と遊んだとか、自然をいっぱい楽しんだとか、そういう思い出がいっぱいあったら帰ってくるんじゃないかなと思います。

熊本市からこっちに来て思ったのは、体育大がある関係かスポーツとかはすごく盛んで、人口の割にはすごく盛んなスポーツがいっぱいありますよね。そういうのをいっぱい小さいうちに楽しんで、そして、医者になるなら、受験勉強とかそれなりにしないといけないですけど、それよりは、その後、何を自分で学ぶかというところが大事なんだろうと思うので、いろんな経験をつんでいるときっと帰ってきてくれるのかなとは思っていますよね。

こちらでやっている「ヒメとヒコ」の高校生のミュージカルをほとんど家族で毎年見に行くんですけど、あんなのを見ると、大隅ってすごいんだねという、「大隅」という言葉が子ども達の中にあるんですよ。大隅と言っても結構広くくりですよ。そういうのをちゃんと知っていて、すごく歴史のある地域なんだなというのも知っていて、地域に対する愛着みたいなものがしっかり育っていくというのはいいですよ。

大学の時はみんな外に出ると思うんですけど、地域のことを子供たちが身近に感じて知っているということで、自分の出身地はここで、こんな場所という、何かそういう思い出とか、帰る場所とかそういうのがあると、また、しばらく都会で頑張るけど、最後は帰ろうというふうに、戻ってくるのかなと思います。

全国の方に対しては、ここは自然がいっぱいで住みやすいところだと言いたいです。医師として技術を上げたいというところがあるので、最初から地方に住むというのはないと思います。実地の技術というのはやっぱりある程度中央の病院とかで経験しないと身につかない部分があると思います。ある程度の経験が身についた後であれば、今は、インターネットもあり、わざわざ中央に出ていかなくても学べることは多くなってきているし、自分の専門性を生かせる場所があるというのが大隅地域の魅力の1つかなと思いますよ。



たばたあつこ 田畑 篤子

高原病院（曾於市）



【プロフィール】

祖父母・父の実家は曾於市末吉なのですが、私は父の仕事の関係上（鹿児島大学附属病院に勤務していました）鹿児島市で育ちました。大学は県外の大学を卒業しました。

夏休みや、冬休みなどの長い休みには祖父・父が開業していたこちらの病院で過ごす事も多く、幼少の頃より医師として働く祖父や父の後ろ姿を見て育ちました。

また、小さい頃から病院の職員の方達との交流もあり、そういう意味でも病院に関しての思い入れがあります。

医師や医療が小さいころより身近にあった環境で育ったせいもあり、漠然と医師という職業には興味もありましたが、高校3年生の受験の際、父の言葉「頑張って、医者を目指してみれば？」が背中を押してくれ現在に至っています。

大学卒業後は、父も在局した鹿児島大学附属病院第二内科医局に研修医として入局いたしました。

研修医の時は、鹿児島市立病院や南風病院などの県内の病院等を回った後に、結婚・出産を経て、当地 高原病院に帰ってきました。併設している老人保健施設で非常勤として勤務した後、平成12年より高原病院で常勤医として働いています。

専門は内科、腎臓内科で透析専門医の資格を持っています。高原病院は、曾於市で最初に透析を始めた病院で、透析開始の頃より患者様もおられ私も一助になればとの思いもあり、現在主に透析医として頑張っています。

【日頃の思いなど】

当院の特徴と致しましては1) 整形外科医も常勤におり曾於市では唯一の回復期リハ病棟がある事と2) 透析療法ができることだと思います。

また介護保険開始前より訪問診察や訪問看護など在宅医療にも取り組んできました。老人保健施設、訪問看護、ヘルパーステーションが併設しており、高齢の患者さんが退院後も安心して自宅で生活できるようにお手伝いできる場所は当院のアピールできる場所ではないでし

ょうか。

こちらの地域では、患者さんの状態が急変したときの受け皿が不足しており、時として隣県である都城の医療機関のお世話になってしまう事もあり問題になっていま

す。また私の専門領域である、透析患者さんの、どうしても当院での対処困難な急変時に大隅鹿屋病院や、鹿児島市内の医療機関にお願いせざるを得ない事もあり、患者さん・ご家族にとって大変なご負担になり、常々大変だと考えています。

医療連携についても、例えば鹿児島県内の先生方とは、率直なお話もでき、また日頃の交流などもあり連携が比較的容易に取れる場合もありますが、都城の医療圏ですと、県や医師会も違いますし、あまり存じあげていない先生方とコンタクトを取らなければいけない場合もあり、最初の頃は戸惑いを感じていました。

ただし、最近では、色々な試行錯誤を重ね、徐々にではありますが、諸先生方との関係性も構築出来ていると感じているところ

です。ご家族が遠隔地にいらっしゃる場合に、例えば鹿児島市内や、鹿屋市だと遠くでの入院は当然ですがやはり大変だとお話される場合も多いので、今後はできるだけ当院で受け入れられる体制が取れるようにしていく必要性は強く感じている昨今です。

【医師の確保について】

今後の当地域の展望として、ますます高齢化は避けられない課題ではあると思われ

ます。末吉地区ではご高齢の方の一人暮らしの割合は、全国と比べてもとても高いものと思われ

ます。医療の充実という意味でも、若い年齢層含めての地域興しや医療の活性化図らねばならないものだと考えています。

医療の分野では、例えば医師会を中核とした、地域的に核となる病院中心に医師会の先生方のご協力を仰ぎ、医療の充実を図っていかなければならないものだと思います。

地域の中核となる病院に安心して患者さんを、お願いできるような体制ができるような環境が整わない限り地域医療の充実には結びつかないものだと考え

本音をお話できれば、現状でどうしても鹿児島市内に医師が集中している現状を踏まえ、どうしたらもう少し地方で頑張ってみようかと思える、動機付けや対策を考えて行く必要があるかと考えていますが、今ひとつ納得いく答えでない歯がゆさも感じています。

【プライベートについて】

現在の状況は、基本的に鹿児島市内から通勤している状況です。

子供は3人いて、26歳、23歳、18歳です。

あまり没頭している訳ではないのですが、時間が許せばヨガや、アロマセラピーなどに興味があります。

なかなか完璧にこなせませんが、もちろん時間があれば休日は家事一般に追われる生活です。

結婚、出産・子育て後の職場復帰に関しては、私の場合幸い復帰できる場所があったので、今日に至っております。

但し、私に限らず、結婚、出産を経た周りの先輩医師や同期の女性医師のほとんどの方が、医師を辞めることなく職場復帰されがんばっていらっしゃいます。皆さん医療に携わるといふ職業意識をもち、医師としての仕事を継続されています。

ただ、大学に残って色々研究に携わるとか、大学での仕事を一生の糧にして頑張ろうと考えると、女性医師ではとてもハードルが高いと考えざるをえません。

例えば医局に残って研究継続し結果を出そうと考えると、実際女性医師にとってはなかなか現実的には難しいのが現状です。

女性医師にとって、キャリア・アップを図る事には個人差があると思いますが、私にとってはとても大変な事のように思われます。

現実的には、結婚・出産なども経験し、医師としての満足できるキャリアを重ねるという事は、現時点ではとても困難ではないかと思う現状があります。

【大隅の魅力について】

幼い頃の記憶をたどると、志布志の海とか、ダグリ岬の景色は今も懐かしい風景としてよみがえってきますが、現実には通勤中の高速道路から見る錦江湾や桜島がより身近ですが、少し余裕ができたなら、幼少期の原体験を訪ねてみたいと考えています。

【医師を目指している大隅の子供達や全国の医師、医大生へのメッセージ】

私ごとではありますが、貴重な経験として、県医師会女性理事としての仕事をさせていただきました。

諸先輩の女性医師や、大隅地区においても女性医師の先生方も、数多くの先生方が、女性医師の勤務環境・労働環境や、勤務形態の改善などに真摯にご尽力されています。

今後の日本の将来を考えると、大隅地区の女性や女の子達にも是非医師を目指して頑張ってもらいたいと思っています。

男性・女性の垣根を越えて、何かを良くするために医療の分野でも、大いに若い頃は研鑽を重ねて、色々見識深め是非、大隅地区に戻ってこられ一人でも地域医療のためご協力をお願いできればと願っています。

女性医師は大変ですが、やりがいのある仕事であると思います。

一人でもご賛同頂いて、大隅地区のためにご尽力願えればと思っております。



志布志の海水浴場

田村幸大

社会医療法人鹿児島愛心会
大隅鹿屋病院 副院長・内科部長 (鹿屋市)



【医師を目指すきっかけ】

私は、もともと静岡県浜松市の出身で、高校までは静岡で暮らしていました。高校の2年生までは文系のクラスで、将来何をやるのかなと思ったときに、弁護士とかかなと思っていました。

高校2年の夏に将来を思い描いた時、当時、よくテレビで救命センター24時とかをやっている、カッコいいなと純粋に思い、医師になりこういう仕事をやってみたくて強く感じました。直接、人を助ける、人の役に立つということを感じた時に、医師の仕事の方がと思い、3年生の時に理系に移りました。

医学部受験にあたって、途中で理系に移ったこともあり、履修科目の制限等の関係で推薦入試を受けられる国立の大学ということで長崎大学に合格し長崎に行くことになりました。

【研修医時代について】

現在の専門は、内科全般になります。医学部の時代はずっと救急をやりたいと強く思っており、当時の長崎大学だと救急医学の講座がなかったのが、救急のトレーニングをしっかりと積みそうな場所ということで徳洲会で研修しようと思いい、いろいろ見て回り、6年生の夏休みに一番最後にここに見学に来て、ここにしようと思いました。理由は、適度に人がいなかったからです。人がたくさんいる環境だと、教育のシステムとしては整ったものであるのですが、人がいないほうが、どんどんやらせてもらえる。習うだけでなく、自分でいろいろやってみたくて、医師として活躍したい。研修医としてもやれることはやりたいという思いがありました。

ここで2年間初期研修をやり、3年目で福岡徳洲会病院に1年、内科の研修を中心にしました。救急は外科と思いがちですが、症例にあっていると、今の時代、高齢者が多いので6、7割が内因性の疾患なんです。それでそのまま内科医になったという感じです。

4年目は徳之島徳洲会に行きました。島、島の大きな病院はそこだけで、医師も少なく、まさに地域医療というか、医

師として相当鍛えられたかなと思います。そこでは全てが自分の力量次第。次に頼る先がない。そこでの経験は、相当強烈な印象として残っています。

5年目に湘南鎌倉病院でチームマネジメントのトレーニングも積んでここに帰ってきました。

【医師としての思い】

今でこそ、内科医も増えましたが、徳之島時代、ここに戻ってきて内科医が自分一人か、二人の時など、辛くて辞めたいと思った時期もありました。自分が辞めたら困るだろうなという思いとのジレンマです。

でも、いろいろな難しい病気や重症の患者さん達を自分が診て、診断して、治せるとなると喜びも大きくなって抜けられなくなる。やり始めたら簡単に足を洗っちゃいけないという思いや周りから自分が支えられているという思いがあって続けて来たのかなと思います。

ここで研修したいと思ってきてくれる先生方は、自分が窓口として何でも診断できて治療できるようになりたいという考えを持った人達が入ってきているような感じはありますね。ここを選んでくれている研修医とかは、大学病院ではそれぞれの専門が診ているところを、自分たちで診ていかなければならないという状況、むしろそれがおもしろいということで選んでくれているところはあると思います。

専門医との連携については、この領域だとこの病院やこの先生、ということをお互いに分かっているので、夜中に画像を送信して診てもらえたり、比較的気軽に相談して、お互いに転院や相談などの連携をしています。狭い地域なので、自分たちのできるところは頑張るし、これはお願いしたいというところは持ちつ持たれつでお互いにやりとりしやすいというのはあるのかもですね。

【地域でのふれあい】

救急のケースが多いので、例えば、こちらで受け入れして、迅速に診断とか治療ができて、もし、遠方までいかなければならないとなると危なかったケースとかは良か

ったなと思ことはありますね。たくさんよかったこととかあったと思うのですが。よかったことはすぐに忘れてしまつて、トラブったことはよく覚えているんです。

【医師確保について】

一つは若い世代。バリバリ救急をみて手術もやってくれている人、10年目くらいの人達が活躍してくれているので、そういった人達に来てほしい。

そういった世代の人達はまだまだ修練を積みたいという人が多いので、いかにそういう思いに答えてあげられるかが課題になると思います。どうしても都会にある大病院、基幹病院から離れると時代の先端医療とかから離れていってしまうのではないかという危惧というのはみんな持つと思います。そういったことを心配しなくても、こういった環境でもトレーニングが積めるのだというのが担保されていれば、若い人達も結構来てくれるのではないかと思います。

ただそれをどうやって実践していくかということになる。それは、どうしてもある程度指導医として、指導的な立場の人が揃っていないと難しい部分はあります。指導できる人が揃っていて、そういった環境があれば十分選んでもらえると思います。

それと、教育の部分は大事だなと思います。子どもの教育を考えた時に、外に出てしまう先生もいたりする。今後教育環境が充実していくといいのではと思いますね。

【プライベートについて】

鹿屋市内で家内と暮らしています。すぐ近くにコンビニやスーパー、銀行もありますし、全て徒歩圏内なので便利です。

出張の時にもすぐ近くに空港行や鹿児島中央駅行バス停もあるので、本当に便利です。利便性は高いですね。

趣味は、走るのが好きで、よく夜に走っています。だいたい10キロくらい走っています。忙しいので週に2、3回くらいですかね。遅いときには10時とかから走り出したりします。昔は菜の花マラソンとか3回くらい出ました。走るコースとしては、昔、線路があった跡のフィットネスパスで、自転車と歩行者の専用の道になっていますけど、あれでずっと走っていくと、霧島が丘公園とかに開けて、晴れている時に走ったりすると、いい風景だなとか思つて、気持ちいいなと思いますね。

好きな場所としては、バラ園とかいいですかね。バラ園の隣の霧島が丘公園も

いいです。海もとても綺麗に見えて良いところだなと思いますよね。

焼酎はあまり飲まないのですが、大隅に住んで思うのは、食べ物全般に美味しいですし、コストパフォーマンスもいい。それをよく感じるのは東京とかに出張する時で、やっぱり大隅は食べものがすごく美味しいなと感じます。

【医師を目指す大隅の子どもへ】

医療の供給を満たしている地域ではないので、まずは医師を目指してほしいですね。

大隅半島だけではなく、日本全体で必要とされている仕事だと思うので是非めざしてほしい。自分の故郷の医療は日本全国から比べたらまだまだ足りてはいないので、同じ医師をやっていくなら、こういった環境も選んでもらえたらと思う。

大きな病院等で医師としての研鑽を積んでいきたい思いも分かるけど、同じような環境で研修をするなら、その地域での研修をしてみないと地域のことは分からないので、大隅半島に戻ってきてやってみたら伝えたいですね。

【全国の医学生や医師へ】

こういった地域だからこその研修、できる医療提供のあり方というのはいろいろあります。大学病院もしくはその関連病院など大きな病院でやっている医療が日本の医療の全てではないので、こういう環境でやっている医療というのも最初に経験して欲しいですね。その上で、実は自分はこういった環境でやってみたいんだと気づくこともあるかも知れないので、いろいろと見学してみたり、実際、そこで働いている医師の話聞いてもらったりとかをしてもらいたいですね。

最終的に、大学病院で研修したいんだとか思つても構わないんで、医者として15年とか20年とか続けていく中で、どこかで考えが変わってくることもあるかと思つたので、その時に思い出してもらえればいいのかと思います。



(鹿屋バラ園)

てづか よしひさ 手塚 善久

手塚クリニック院長（志布志市）



【プロフィール】

出身は薩摩川内市です。小中学校まで薩摩川内市にいて、高校は鹿児島市内に行きました。大学は福岡大学を卒業し、それから鹿児島大学の第一外科に入局しました。医師になろうと思った時期とか理由については、父が医者をしていたということが一番の理由ですかね。父は私が生まれたころに薩摩川内市で開業をしたらしいです。私の専門は、昔は外科でした。消化器外科ですね。

鹿児島大学に入局してから、県立大島病院で麻酔研修をして、県立鹿屋病院、鹿児島市医師会立病院、県立薩南病院などで勤務して、宮崎の社会保険病院江南病院というところに行くと、1回大学に帰ってきました。それから川内済生会病院、県立北薩病院ですね。また大学に帰ってきて、2年半ぐらいいました。私はそのとき鹿大の第二病理学教室というところに行くと、今度は、串間の市民病院に行くと、そして、41歳の時にここで開業したんです。

串間に3年いたんですけど、その間に博士号も全部取ってしまって、その後どうするかというのは我々の選択になってきます。だんだん40歳が見えてくると、結局、大学に残るのか、リサーチを中心にしてやっていくのか、どこかの勤務医になって臨床を中心にやっていくのか、開業をしていくかといった選択肢があるわけですよ。

その中で考えたときに、若い人たちがだんだん出てきますので、やっぱりある程度、身を引くことも考えないといけないうし、開業のほうをやってみようかと、そこからですよ。

薩摩川内市のほうは兄が継いでいて、私は大学勤務のときに星ヶ峯に家を買って親子3人で住んでいたんですけど、そこからどこか行けるところがないのかなとまず考えて、市内だとビル診かなというふうな感じと、車で30~40分、40~50分のあたりとかいっぱい見に行きました。貯金もない、何もない、反面、土地が高いですね。外科をしていましたから、やっぱり入院、医院のちょっとした手術場も持ちたいというのもあったりもして

そんな形での開業を考えていたものですが、もうだめなのかなんて思っていたら、ちょうど串間の外科病棟にいた看護師さんのお父様が志布志で不動産業をされていて、志布志はどうでしょうかという話で幾つか見せていただいて、その中の1つがここだったんです。

ここに住むことによる娘の教育に対する不安といったものは何もなくたってですね。私は私、娘は娘というふうな感じで、親として子供に対しての教育をとるのはもちろん考えますが、自分の人生は自分の中で娘をどうして育てていくかということを考えていかなければいいかなというふうに思っています。

結局、中学校まではこっちにいて、高校は私と一緒に鹿児島市に出ましたので、それはそれで彼女の決めたことですし、それに対してはもちろん夫婦で協力し合って娘をサポートしましたけどね。

逆単身生活もいいですよ。ひとり住まいも、妻のありがたみもわかり、また昔の独身を謳歌するようなどころもあって。物は考えようですからね。大体もう高校生ぐらいになると、お父さんなんてバクテリアみたいなものじゃないかな。

【日頃の思い】

ただ、一生懸命患者さんを診るだけ、ただ、ひたすらそれだけです。

開業して思ったのは、僕らは経営に対して全く知らない。開業するとき非常に苦労しました。しかし、それはそれでいろいろ勉強にはなったなとは思っています。

一生懸命患者さんを診るためには自分もちろぬ勉強を含めて人間的にも磨かないといけません。最初のころは看板も立てたりしました。でも契約期間が終わった途端にもう全部やめました。一生懸命診ておけば、来てくださる人は来てくださるし、もうそれだけでいいと、もうそれ以上のことはしない。

この地域のいい所は、人間が非常に純朴でお人よしな人が多いということですね。

ただ、病識というか、糖尿病にしても何にしても、いろいろ教えないと、もちろん我々がこの住民に対して啓発していかないといけないんだと思うんですけど、病気に対してのいろんな情報というのがちょっと欠けていらっしゃる感じがして、そこはどうしたらいいのかなという思いがありますね。

この地域の医院の息子さんが大学で糖尿病の専門医でいらっしゃるけど、彼は県内のいろんなところに行って講演をするわけですよ。そうすると、彼は患者さんじゃなくて、我々とか、看護師とか、栄養士とか、いろんな職種に対しても講話をしたりする。そうすると、その裾野がずっと広まっていくわけですよ。あの仕事ぶりを客観的に見ていて、すごいなという思いはありますよね。だけど、僕らみたい直接患者さんと接している人間というのは、また、それなりの考え方でやっていかないとはいけません。

例えば、僕らなんかでも、大学にいたころというのは、食道がんとか、昔は食道がんとってほとんどないような病気で、そういう難病とかまれな病気、なかなか民間で手術しない病気で、そういうものを鹿児島市内の大学病院で手術する。それがだんだん医療レベルが上がって、民間の病院でもできるようになれば、それはもちろんいいんだけど、そういう専門的なドクターも必要なんだと僕らは思っています。

ある一種のスペシャリストという感じですよ。みんながみんなそうになると、困っちゃうわけですね。いろいろ一次、二次、三次というふうな感じで、こうしてもそれがうまく回っていくというのがとても大切なんだろなとは思っていますね。

ですが、専門的になり過ぎると、医師の派遣もできない。例えば、もう私、ここしか診れませんという人がいっぱいすぎると、また困るわけですよ。だけど、大学にいと、つついそうなっちゃうんです。そうすると、もう市内での開業しかできない。もうちょっとグローバルに、いろんな外科も内科も整形も大体診れますよという教育というのを、今から地域枠の学生さんとかが、自治医大みたいな研修システムになってやっていくんだろなとは思いますが、そんな教育システムもやっぱりある面では大事だと私は思っていますね。

僕がここで開業して非常にためになったのは、地方を回っていたということ

すね。地方は、医者が少ないじゃないですか。いろんな科を診ないといけない。何でもかんでもしないといけない。

普通、鹿児島市内の総合病院なんかは、オートメーションですよ。消化器内科がいて、そこで病気を発見して、深達度、それから転移度を全部調べて、「はい、先生、ここからここまで切ってください」と。外科医はもうそれにはいと言ってそれをするのが鹿児島の市内の病院。非常に効率的ではあるけど、何もおもしろくないですよ。

症例をどんどん、まあ言えば数をさばくのか、一から自分で見つけて、自分で診断して、手術して、それは症例はすごく少ないんだけど、そっちを選ぶのか。そうすると、私はどっちかと言うと、後者のほうをずっと選んだものだから。外科というのは何でも屋さんですよ。私は今、腹も切らないし、ほとんど何もしないけど、外科をしていてよかったなと今でも思います。たまに患者さんの中で、これは違うというのはすぐわかりますね。腹が痛いと言っても、これはやばい、盲腸だとか、これはすぐ手術したほうがいいのかというあの感覚は外科をしていないとわからないですよ。

それから遠回りするのもいいですよ。近道ばかりしていると、やっぱりちょっとだめかなという感じがしますね。だから、僕は大学の2年間ずっと病理にいて研究室で顕微鏡ばかりみていました。おかげで目も悪くなったと思います。しかし、おもしろかったですね、病理の世界というのは、こんな世界があるんだなと思いました。



志布志市の
ゆるきゃら
「志武士ししまる」

【医師の確保について】

ここに来てくれというのは、かなり厳しいと思います。この大隅で生まれ育った方が本当は帰ってくるのがその責務だと思います。それでも家庭があるとね。

我々も例えば鹿児島市内とかに講演を聞きに行ったりしますが、やっぱり大変ですよ。今はテレビ講演会なんかもありますので少しは助かるんですけど、先生によっては著作権の問題があって、なかなかそういうのはできないというふうにおっしゃる方もいらっしゃる。そういう場合は自分

たちで行かないといけないんですけどね。

鹿児島市内はいいなと思うし、東京や博多だったらもっといいなと思いますもんね。自分の興味のある話について、アップデートな情報というか、聞いていたら楽しいなと思いますよ。そして、自分に新しい知識とか、そういうものが聞けるというのはいいですよ。

アピールしていくしかないですよ。だけど、どこもアピールするんですよ。いいところよ、ここはいいところよって、ほかのところは行ったことがないのに、ここはいいところよって言いますから。だから、何かこの土地に縁のある人でないと、私は勤務したところの看護師さんがこっちの出身で、そのお父様が不動産というのがあったし、やっぱり何かのつながりというのがないといけない。

それから、例えば、鹿屋医療センター、曾於医師会や肝属郡医師会とかに大学から派遣された先生方が、ああ、こっちはいいよねというふうな何かいい印象を持っていたら、この地域のこういうところで自分は働きたいなというふうな思いを持っていただけるといいのかなと。

今後、地域卒の先生方が毎年10人ぐらい出てくると、すごい数になってきますよね、あと5年、10年すると。そういう方々が今から臨床実習の中でこちらのほうにも回ってこられるでしょう。そういうところには期待をしていますね。

【プライベートについて】

妻とこちらで2人暮らしです。娘はもう県外の大学に行っています。ほとんど休日はないんですよ。会があったり、いろいろあるんですよ。有明病院の当直とか、曾於医師会の急病センターとか、そういうのが入りますので、医者が少ない分だけ、みんながしなないといけないという、当番医もそうですね。

ジョギングはやっています。ハーフマラソンに走ったりします。釣りやゴルフもしたんですけど、呼ばれたりいろいろあると、1人でやる競技で、人にご迷惑もかけない、すぐぱっと帰ってこられるとかなると、やっぱり走るくらいです。健康という意味でもいいかなと思って、たばこもやめて、いいですよ、すぐ。僕はほとんどこの運動公園のところを基軸にして、1km、2km、5km、10kmコースと、自分で決めています。

パソコンで距離が出てきますので、そこを走っています。

朝がやっぱり走りやすいです。例えば、春先なんかは5時ぐらいには明るくなりましますから、そういうときに走ったりしていません。夜はなかなか走りたいたって思っても寒いし、いろいろ会があったりすると走れないですね。ただ、朝余り走り過ぎると、お昼前には空腹で機嫌が悪くなり、看護師に当たり散らしてしまうことがあるそうで、看護師さんから止めてくれって言われていますが、自分の健康が大事で、はた迷惑はもう顧みず走っていますよ。

【大隅の魅力について】

やっぱり僕は海が好きですね。海を見ていると、いいですね。海の潮風をかいでいるといいですね。船に乗ると、酔っちゃって気分が悪くなりますけど。

食材はおいしい。僕らにとってみればそれが普通と思うから、どうなんですかね。だけど、鹿児島市から来られた方とかに聞きますと、「やっぱり魚がおいしいですね」とは言われますね。だけど、それになれちゃっている自分がいますけど。

【医師を目指している大隅の子供たちや全国の医師、医大生へのメッセージ】

人間性豊かな医者になってほしいなと思いますね。そこだけかもしれないですね。まあ、みんな頑張れと。そのうちに1人でもこっちに来てくれたらなと思いますね。そういう時ってあるんじゃないかなと思いますよ。

ただ、ずっと流れを見ていると、どんどん鹿児島市に一極集中して、地方は、ますます人口減少になってきます。人口が減少するということは、結局、患者さんがいなくなるということですから、若いドクターが人口が減り、患者さんが今から10年後、20年後減ってくるころに来てくれるか、ということを考えますよね。自分が開業を考えるときに、人口がどんどん減っていく、その中でどうなるのかということを考える、と難しいとは思いますが、でも、変わり者の1人や2人はいるだろうと諦めずにはいるんです。



志布志湾